

令和における福生市立学校の
在り方検討委員会
第3回 議事録（抜粋）

日 時：令和4年9月16日（金） 午後3時から5時まで

場 所：福生市役所第一棟2階会議室

- 1 出席委員
- | | |
|------|-------|
| 委員長 | 宇田剛 |
| 副委員長 | 榎並隆博 |
| 副委員長 | 小出宏子 |
| 委員 | 高瀬智子 |
| 委員 | 鈴木智子 |
| 委員 | 南方孝之 |
| 委員 | 泉田巧人 |
| 委員 | 山岸史子 |
| 委員 | 植村多岐 |
| 委員 | 藺田紘一郎 |
| 委員 | 撰梅敏夫 |
| 委員 | 土谷利美 |
| 委員 | 青海俊伯 |
| 委員 | 板垣和生 |
| 委員 | 榎本乃子 |
| 委員 | 板寺正行 |
| 委員 | 町田高司 |
- 2 事務局（説明員）
- | | |
|--------------|------|
| 教育長 | 石田周 |
| 教育部参事兼教育指導課長 | 勝山朗 |
| 企画財政部参事 | 菊地信吾 |
- 3 傍聴人 10名
- 4 議事日程
- (1) 教育長挨拶
 - (2) 前回議事録の承認について
 - (3) 小中一貫校の必要性や期待について
 - (4) 小中一貫校への不安や課題、解決の手だてについて
- 5 配布資料
- 【資料1】「令和における福生市立学校の在り方検討委員会」(第2回)議事録(案)
- 【資料2】「福生市での小中一貫校の設置に対する思いや考え、心配なこと、新たな視点等」
- 【資料3】令和における福生市立学校の在り方検討委員会(第3回)感想等

【教育部参事】

それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和4年度第3回令和における福生市立学校の在り方検討委員会を開会いたします。

初めに教育長より御挨拶申し上げます。石田教育長、よろしくお願いいたします。

【教育長】

皆さんこんにちは。教育長、石田でございます。令和における福生市立学校の在り方検討委員会第3回に当たりまして一言御挨拶申し上げます。委員長はじめ、委員の皆様、大変御多用のところ本日もお集まりくださいまして本当にありがとうございます。

前回、第2回の委員会は、夏休みに入ったばかりの7月末でございました。その時は新型コロナウイルスのオミクロン株が猛威を奮っておりまして、7月は155人、8月は107人の児童・生徒が本市においては罹患したと報告を受けました。これは、福生市立学校の全児童・生徒の実に約8%に当たりまして、今年の1月、2月の罹患の状況よりもはるかに大きい人数になってしまっていました。

猛暑の夏が終わりまして、本市では8月29日に一斉に2学期が始まりました。今日でちょうど3週間目が終わろうとするところですが、児童・生徒の陽性報告は少なくなっておりまして、9月に入ってから昨日まで罹患者は37人とのことです。

そのような中で各学校は感染対策を万全にして通常の教育活動を展開していただいております。例えば、委員2名から欠席との報告がありましたが、それぞれ、名栗の移動教室、そして、奈良・京都修学旅行に引率で行かれております。他にも、道徳授業地区公開講座などの学校公開を、3年ぶりに人数制限等を設定しないで実施した学校や、運動会シーズンがこれから始まりますけれども、保護者の入場制限をしないで運動会を実施する学校があります。まさに「overcome the Corona」、コロナ禍を乗り越えて、学校は、そして子どもたちは本当に頑張っているということを御報告申し上げます。

さて、本日ですが、本市における小中一貫校の必要性や小中一貫校への期待、あるいは、実現に向けて感じる不安や想定する課題などについて御協議をお願い申し上げます。委員の皆様からは御多用のところあらかじめお考えをお寄せいただきまして、本当にありがとうございました。御協議いただく際には、第1回の委員会で私が申し上げましたとおり、これは難しいだろう、あるいは、これは無理だろうというお考えではなくて、子どもたちのために理想の学校を実現するという視点から自由に御意見を賜りたいと存じます。

いただいた御意見でございますけれども、福生市教育振興基本計画第2次に掲げております、基本方針4「地域社会総がかりでの教育の推進」、つまりは、地域の子どもの地域一丸となって育てるといった考えの実現を目指して、本市の学校教育を一步前に進める上で、参考とさせていただきます。

大変簡単ではございますが、以上で御挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【教育部参事】

それでは、次第2以降につきましては、進行を委員長にお願いいたします。

【委員長】

委員の皆様こんにちは。どうぞよろしくお願ひいたします。

また、本日資料の2で配布されておりますけれども、事前に委員の皆様の意見を頂戴いたしました。ありがとうございました。それでは、まず次第2、前回議事録の承認を行います。本日、資料の1として前回の議事録が配布されております。もう事前にお目通しいただいていると思いますが、議事録の内容で何か修正等が必要な箇所はございましたでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、前回の議事録について、特に御異議等はございませんので、承認をいただいたということで、確認させていただきます。

それでは、次第3、小中一貫校の必要性や小中一貫校への期待について、まず事務局から内容の説明をお願いします。

【教育部参事】

第2回の会議の際に、福生市での小中一貫校の設置に対する思いや考え、心配なこと、新たな視点等、及び、第2回検討委員会の感想について委員の皆様にご記入いただければということで御依頼申し上げたところでございます。本日、資料2といたしまして、皆様から頂戴いたしました御意見を一覧としてお示ししているところです。委員の皆様からは、小中一貫校への期待や、その必要性についての御意見をたくさんいただいておりますことから、この場で委員の皆様から思いや願ひについて御説明いただければと考えてございます。

なお、不安、心配なこと、課題、こういった内容も資料の2にお書きいただいておりますが、そのことにつきましては次第の4で御意見をいただきますので御了承ください。以上でございます。

【委員長】

今、事務局から説明がありましたように、小中一貫校への期待、その必要性についてということですが、少し文言を整理したいと思います。小中一貫教育と小中一貫校という言葉が2つありますが、これから資料に基づいてお話ししたいのは、委員の皆様がお考えになっている福生市における小中一貫教育についてです。もちろん小中一貫校についても触れていただいてもかまいませんが、小中一貫校の前に、まず教育についての期待や必要性など、福生市として行う小中一貫教育について、既に文言になっている資料2の内容を基に補足する形で、それぞれの委員の方からお話ししたいと思います。

では、修学旅行に引率中の委員の内容について事務局の方で代読をお願いできますでしょうか。

【事務局】

私は、他市において、主幹教諭、副校長の時に小中一貫教育に取り組んだことがあります。研修会などを通して、小・中学校の教職員全体が同じ地域の子どもを共に育てているという一体感を醸成できました。一人一人の児童・生徒を多くの教員が継続的に丁寧に見ていくことにプラスはあってもマイナスはないという思いがあります。

【委員長】

ありがとうございました。「プラスはあってもマイナスはない」、非常にインパクトの強い言葉だと思います。それから、同じ地域の子どもを共に育てているということは、先ほどの教育長のお話の、地域の子どもたちは地域一丸となって、学校も地域も一丸となって育てていくというところに相通じる御意見だったと思います。

次にお話いただく委員には、町内の各種イベントに体育館を使ったことや、小・中学生と一緒に避難所の設営ができるのではないかとというようなお話もいただいております。それでは、次の方どうぞ。

【委員】

C S委員と共にコミュニティ・スクールの運営をしているのですが、様々な活動をする中で、今は小学生を対象として行っております。それを小中一貫教育という視点の下で、小学生・中学生が共に行えるとより効果が上がるのではないかという思いをもっています。先日行ったC S委員主催の防災訓練など、今後様々な可能性があると思っています。

【委員長】

小中合同でやることによって、避難訓練や防災訓練で、少し効果が出るというようなお話がありました。具体的に、例えば小学校だけでやるのではなくて小中合同で行うというところでどのような効果がありますか。

【委員】

例えば、高学年対象の避難所設営の訓練では、段ボールベッドを作ったり、テントを作ったりして、体育館が避難所になった際の設営を5年生と6年生が体験しました。やはり、いざ災害が起きた時には若い力がどうしても必要だと思います。小中一貫校になれば、小学生だけでなく、中学生も共にそういった経験積むことができますので、地域の力として今後期待できます。そういったことによって、地域に対する愛着や、地域に貢献していこうという思いを、小学生のみならず、中学生にも培っていくことができると思っています。

【委員長】

ありがとうございました。自助・共助とよく言いますが、小学生の時には、自助、

自分の命を守り、安全を確保することが重要です。しかし、小学校高学年になると、中学生と一緒に中学生の影響を受けながら、他の人や地域のために、共助を学んでいく必要があるのではないかとのことです。ありがとうございました。

次にお話いただく委員には、地域学習や郷土を愛する心などをキーワードにして、子どもたちに地域に貢献しようとする意識を醸成したいということを書いていただいております。次の方どうぞ。

【委員】

よろしくお願いします。ここに書かせていただいていること以外も少し加えてお話をさせていただきたいと思います。私はやはり、小中一貫教育には、連続性のある一貫した指導というのを期待したいと思っています。子どもたちはこれからの社会を担う人材となるべき存在です。成人年齢も18歳に引き下げられまして、子どもたちが社会の形成者として社会のことを知り、自ら関わっていこうとする力を培っていくことが非常に重要であると思っています。

そして、そういったことを踏まえると、豊かな心の醸成ということも大切ですし、義務教育が終了した時点で子どもたちにどのような力が身に付いているのかということや、子どもたちの姿を市として明示していく必要性もあると思っています。

それは、福生の子どもたちへの期待や願いを、義務教育終了段階において身に付けさせたい力や実現したい姿に込めるといったことだと思っています。

一貫した指導というところでは、まず学習面については、将来の自立に向けて必要な力を確実に身に付けていくことが必要だと思っています。これはもう皆さんよく分かっている、よく御存じのことだと思いますが、小学校6年生の学びと中学生の学びにはやはりギャップがあります。内容が高度になっていき、学ぶ内容も増え、またスピードも速くなっていきます。この点を、小中一貫教育とすることで、学びが無理なく、継続できるようにしたいと思っています。そして、9年間を見通した系統的な学習が展開できたらよいと思っています。

その9年間を見通した学習を展開できるように、福生市としてのカリキュラムを作成できると良いと思います。そのカリキュラムを行うことで、不登校などの減少にもつながっていくのではないかと考えています。

また、カリキュラム作成につきましては、福生市では外国籍の方が多く住んでいらっしゃることから、外国語教育の充実や、これからの時代に求められるICTに関わる教育の充実、また、郷土を愛する、地域に貢献する心情を育む地域学習なども組み込めたら良いと思います。9年間を見通して、低学年から少しずつ内容を増やしていくような形で地域学習などを行えたら良いのではないかと考えました。それが第1点です。

2点目としては、私は、自尊感情、自己肯定感の向上と、思いやりの心情の醸成というのが重要だと思っています。そのためには、異年齢での学びや活動、交流の充実というのが大切だと考えています。今、兄弟の数が減っていて、昔は自然発生的に異年齢の子どもたちが連なって遊ぶような場面もあったかと思いますが、そういった機

会は減少していると思います。

自尊感情や自己肯定感は日々の学習でも育てていくことができますが、やはり異年齢での学びや活動、交流の充実が有効であると考えています。その学びや活動、交流などは、いろいろな形があると思います。小学1年生から中学3年生までが一堂に会するようなことがあっても良いでしょうし、近い学年、それから、少し離れた学年で交流するなど、活動の内容や目的を鑑みて様々行えると考えています。

異年齢の活動を通して、上の学年の子どもたちは、下の学年の子どもたちに説明したり、下の学年の子どもたちをリードしたりすることで達成感や自信を付けていくことになるでしょうし、また、思いやりの心の醸成にもつながっていくと思っています。また、下の学年の子どもたちは、上の学年の子どもたちに対して憧れを抱いたり、モデルにしたりするのではないかと考えました。一貫教育ならではの学習活動を行っていけると良いと考えています。

最後に3点目ですが、将来を見据えたお話を最初に少しさせていただきましたが、キャリア教育に関連するようなこともできたらよいと思っています。例えば、小学校高学年から中学校段階において、様々な職業について知り、携わっている人の話を聞くなど、自分の生き方、在り方を考える教育の充実があったら良いのではと思っています。将来のことは変化していきますし、いろいろ経験する中で変化していった良いものであると思います。しかし、子どもたちがこういった高学年から中学校の段階でいろいろな情報を得て、情報を得たことで目標・夢をもって、また、その目標・夢をもつからこそ、こんな学びがしたいというような主体的な学びにつながったら良いと思っています。

職業に関することなので、こういったことは、小学校までは行わないで中学校からということではなく、いろいろと抽象的なこともかなり分かるようになる小学校高学年から中学校に上がるころでできたら、更に良いのではないかと思います。

私としては、連続性のある一貫した指導ということで、学力、それから自尊感情、将来を見据えたキャリア教育という点で小中一貫教育に期待したいと考えております。以上です。

【委員長】

ありがとうございました。資料2以外のことにもだいぶ触れていただきまして、ありがとうございます。特に最初の9年間っていうのはやはり非常に大切な視点だと思います。

委員が今おっしゃったように、義務教育9年間が終わった時にどういう力を付けているのか。今の小学校と中学校では、もしかしたら小学校の先生方は、中学校に送り出したあと、中3の義務教育が終わる時にどうなっているのかということまでなかなか意識できていないのかもしれないかもしれません。中学校は中学校で、自分のところに入って来る前の6年間にどういう学びがあったのかということが意識できていないのかもしれないかもしれません。9年間でどうやって力を付けてくのかというのは非常に重要な視点だと思います。

その他に、自尊感情、異年齢集団、それからキャリア教育についてもお話しいただきました。前回の委員会で学力や自尊感情についてお話がありました次の委員には、日頃様々なことに取り組まれているコミュニティ・スクール委員というお立場から、お話をいただければと思います。次の方どうぞ。

【委員】

自尊感情については、子どもたちが学ぶ喜びを感じる中でもたせてあげたいと思っています。特に、教員による指導ももちろん大事な、基本的なものですけれども、地域の人たちが子どもたちの学習に関わっていくということはこれから重要になってくると思っております。ですので、コミュニティ・スクールが核となって、地域の人々が学校や子どもたちに関わることができるのはとても良いことだと思います。それが自尊感情につながる重要なことだと考えています。

【委員長】

ありがとうございます。例えば教育を更に良くして福生の子どもたちにもっと自尊感情を付けさせようという方針を出したとします。そこで重要なのは、今、板垣委員からお話のあったように、やはりコミュニティ・スクールとして、小学校段階から9年間かけて地域の方がいろいろとじっくり関わっていくというような、9年間の小中一貫教育と地域の関わり方だと思うのです。ありがとうございます。

それでは次に、町会のお立場からお話を伺いたいと思います。資料には、学力向上はいいとして、むしろ不登校やいじめの減少につながっていけば良いのではないかと非常にインパクトのある言葉をお書きいただいております。それから、近隣の地域の会館などを入れられれば、施設の複合化・集約化もできるといった提案もいただいているのですが、そういったことも含めて、いろいろお考えになっていることを交えていただけたらと思います。お願いいたします。

【委員】

まず、小中一貫校と小中一貫教育という区別が私の頭の中で十分できていないままコメントしたような気がしています。2点目におっしゃった、小中一貫校の施設形態については、4番のところで事務局に少し質問したいことがあるので、後ほどします。

私もコミュニティ・スクールの活動に携わっていて、市が掲げている地域総がかりの教育ということに関心をもって支援しないと、やはり福生の教育はうまくいかないと思っています。

小中一貫教育に関するいろいろな意見は、校長先生方に比べてなかなか知識がないものですから、割愛して、今やっていることでお話しします。第五小学校では、安全教育推進校として、先ほども話題になっていた自分の命は自分で守るという自助の力を備えるために、安全マップを子どもたちに作ってもらっています。また、11月には、南田園地区が福生の中で一番水に弱いエリアであるため、防災について関心をもってくださっている、第三中学校の生徒と一緒に防災訓練を行います。第三中学校の生徒

には、既に2年続けて参加していただいています。

そういった中で、生徒がやっていることは、自助から一歩進んで、共助だと思っ
たのです。そして、今度は、次のステップとして、大人が自助を小学生に教えるだけ
でなくて、共助を会得した中学生が小学生の自助を教えられるような地域になっ
たら、より小中一貫した教育につながっていくのではないかという感想をもちまし
た。以上です。

【委員長】

ありがとうございます。小中一貫教育について、また、今の自助・共助のこと
について、補足、それから補強していただきました。

今、9年間のつながりについてお話をさせていただいたわけですが、9年が始まる
前の段階、子どもたちがまだ学齢に入る前、そこから子どもたちは地域で生活して
いるわけです。そこで、小学校へ入学する前のところで、保育園、それから幼稚園の
お立場からお話をお聞きしたいなと思いますが、御欠席ですので、事務局の方で代
読をお願いします。

【教育部参事】

私立の小中一貫校の話をお聞きしました。5階建ての校舎で、1、2階が小学校、3、
4階が中学校、5階は特進クラスだとのことでした。小中一貫なら、つながっている
ので、小学校から中学校へ上がるという不安がストレスにならないと思います。以上
でございます。

【委員長】

これは、1つの建物の中で、下が小学校、上に中学校というような完全に一体型の
例ですね。ありがとうございます。

それでは、幼稚園の方では、つながりの大切さというところがキーワードのお話か
と思います。次の方どうぞ。

【委員】

私は、小学校に送り出す立場としては、卒園していく子どもたちがどうしているの
かと思って日頃から過ごしております。ここ数年、幼保小連携推進委員会というのが
ございまして、その機会で、つい先週、七小の1年生の担任の先生に、来年小学生に
なる年長児のクラスを見に来ていただきました。その中で、年長児のクラスにはこう
いう子がいて、という話も先生とさせていただきました。

こうして小学校の先生方とつながっていくということはとても大切だと思いま
した。私どもはそれほど大きな幼稚園ではないので、この子がこういうことが今苦
手で、などの具体的なお話ができます。また、逆に、1年生がどうしているのかとい
うのを聞かせていただいて、頑張っている姿を知ることができたり、逆に学校が心
配な面を聞いて、幼稚園の時にもっとその子にできることがあったのではないかと
思ったり、先

週も午前中だけでしたが、小学校とのつながりができたことで、とても充実した時間を過ごせたことを実感しました。

小学校・中学校で、同じ1人の子に寄り添おうとしたら、その子が小学校の時こうだった、中学校の時はこうなるのではないかなど、そういう見通しなども踏まえて、教員同士がつながっていくというのはとても大事だと感じました。

コロナ禍前からも、私どもの幼稚園が七小の区域ということで、七小の1年生と年長さんがつながりをもたせていただいている、小学校1年生の子が、ぜひ小学校に来てくださいということで招待状を幼稚園にもってきてくれたことも、年に1、2回ありました。

その時は図書室に案内してもらって、子どもたちも各グループに分かれました。その後、小学校1年の子がそれぞれ考えたクイズを出してくれて、それに幼稚園児が答える活動をしました。私も1年生を十分知っていますし、卒園児を含め、小学生になって、こんなに頑張っている姿を目の当たりにして私たち幼稚園の教員も感動しました。また頑張って1年生が出したクイズに年長さんも頑張って答えている姿も見える良い機会でした。

コロナ禍になってなかなか実際に行けなくなってしまったのですが、3月にはZOOMを用いてオンラインでつながりました。その時も小学校の1年生が頑張って幼稚園児に向けて小学校の滑り台の絵などを描いて、「これは何でしょう。小学校にもありますよ」などのクイズを出して、幼稚園児が答えていました。そこでも、小学校の1年生が生き生きとしている姿や、少し緊張した幼稚園児の子が、頑張って答える姿や、お互いに拍手し合う姿が見られました。

本当は対面が良いですが、オンラインの中でもそういうふうにつながることができて、幼稚園の年長さんが、小学校に期待をもてる良い機会だと思いました。このような取組が小学校から中学校につながるのと同じように、子どもたちにとっては、とても充実したもの、有意義なものだということのように感じたので、書かせていただきました。以上です。

【委員長】

ありがとうございました。今、皆さんお話を聞いて、子どもたちの姿や子どもたちを見て、喜び、感動し、少し心配する教員の姿が、ありありと浮かんだのではないかと思います。一方で、小学校、中学校ともに忙しくてなかなか交流できてないところもあり、情報交換だけで終わるようなこともあるかもしれませんが、小中一貫教育においてもっとたくさんつながって、そして、お互いに協力して、9年間でどんな子どもたちを育てるのかを共有する。そういうことが日常茶飯事となって、どんどんつながっていけば良いということだと思います。今のお話は、幼稚園のお子さんと、小学校の児童でしたが、それが小学校と中学校でも同じような形で必ずできるのでは、という御意見でした。

これまでで、子どもたちのイメージがだいぶできてきました。資料には考えていただいたことをたくさんお書きいただきましたが、例えば、先ほども縦割り教育のこと

ができました。縦割りのこと、それから、地域の文化を守るためのクラブ活動か何かはできないだろうかということ、さらには、大人の目が常にある学校なら門をもっと大きく開くことができないかなどについて、保護者としてのお考え、思いの丈を語っていただければと思います。次の方どうぞ。

【委員】

第1回の石田教育長からの御挨拶にあった、「無理だろうというお考えではなく、子どもたちのためになるなら、あるいは、理想の学校を実現するためにぜひ必要という観点から自由闊達（かつたつ）に御意見を賜れば」という言葉に甘えて、まず理想ばかり書かせていただいたことを御了承ください。

子どもたちがこんなシステムになったらこういう成長が望めるかもしれないという視点で書かせていただいています。縦割り教育の相乗効果というところでは、五小に関しては、小学校1年生で入学してきた子どもたちを、小学校6年生が、期間限定か1年間丸々かは把握できていないのですが、面倒を見えています。

そして、うちの長女は今、中3なのですが、いまだに今の小学校3年生、うちの長女が小6の時に面倒を見た小学校1年生に関しては、通学途中で会った時にも、「何々ちゃん元気」とか、「大きくなったね」などと声掛けをするような関係性ができあがっていると思います。

そういった縦割りの関係性が、今度は中学3年生と小学6年生との間などでできると、思春期に入りかけた小学生に対して、思春期を少し抜け始めている中3ぐらいが、「分かる分かる」、「そういうのあるけどさ、そんなのもう少し我慢しとけばすぐ終わるもんだからさ」などと相談に乗ることもできると期待して縦割り教育について書かせてもらいました。

第2に、小学生に関しては、少人数の算数教育などで中学生が見てあげられないかと思っております。

私自身も会社で技術を後輩に教えるのですが、教える時に初めて、こういうところがつまずくな、と気付けるところもあり、そういうふうに教えながらにして教える難しさが分かると、逆にその教えた中学生たちは、今度学ぶ時に学び方を理解することができると思います。ただ勉強するだけではなくて、学ぶ姿勢を上下の関係でうまく利用したら、教える苦勞を知ることで先生の苦勞や、その苦勞に対する感謝を学べると思います。

第3に、前回の会議の中で、皆さんから、地域との協働について御発言がある中で、何をやったら学校と地域というのが本当にいい関係性でつながれるのかを考えた時に、地元の文化、一つはお祭りやおはやしなど、そして、公民館がお年寄りの方を対象に行っている手芸のワークショップなどをクラブ活動に取り込むことによって、地域の皆さんと子どもたちの交流が密にできないかということについて書かせていただいております。

第4に、ここが最近一番感じたところですが、小学生、中学生と、その保護者、教職員、地域の方々が、それぞれの関係の潤滑剤となってそれぞれの関係性を活性化し

たいという思いの下、今年の夏休みに五小において夏季の水泳教室に地域の年配の方に指導者として来ていただきました。最終日に、その地域の皆さんでチームをつくっていただいて、子どもたちと、地域の皆さんと、副校長先生も含めた教職員チームの3チームでリレーを行ったのですが、それがとても盛り上がったのです。

話が変わるのですが、CS委員長の提案で、CS委員と教職員と、校長先生・副校長先生も含めて、五小の体育館で全体の打ち合わせを1回行ったことがあります。その時に感じたのが、子どもと先生の中に地域が入るだけ、もしくは、校長先生・副校長先生と教職員の間、我々のような年配のCS委員が入るだけで、新しい潤滑剤ではないですが、新たな流れが生まれたのです。子どもと先生たちだけの夏季水泳教室だったら、恐らくリレーを行おうとはならなかったと思うのですが、そこに地域の新しい風が入ることで新しいイベントが生まれることを目の当たりにしました。小学生と中学生と教職員との間に、保護者や地域の人々が入っていくことで、こういったことが新しく生まれる可能性があると思います。まだ具体的などころまではあまり見えてきてはいないのですが、そういうことを期待して、積極的に大人を取り入れる校風や環境をつくっていくと、新しい潤滑剤となるような活性化した関係が生まれると思って書かせていただきました。

【委員長】

ありがとうございます。いろいろなところで、たとえば学校の中の保護者として実際にこの夏に経験されたことについてお話がありました。最初に言っていた、教えることにより定着するというお話、よく我々も言うのですが、例えば授業で子どもたちが聞いて、分かったつもりになっても、それを誰かに教えたり発表したりしていくと、もっと定着するということだと思います。だから、小中の一貫教育の中で、そういう場面を作ることが必要だと思います。

それから、小学校と中学校の間に、地域、それからCS委員の方が入って、潤滑油になるというお話もありました。小中一貫教育を進める上で、例えば小中で意思の疎通が少し難しくなるような場合、そこに地域の方が入っていただくということが期待できるという御提案をいただいたと思います。小中一貫教育を進める上での地域との関係や、地域の方々が真ん中に入って潤滑剤になるような展開についてのお話でした。

次は、小学校6年生と1年生のことに加えて、御専門である特別支援教育の視点も含めてお話いただければと思います。次の方どうぞ。

【委員】

私からは、誰一人取り残さない教育ということについてお話しします。私が五小に来た時に、支援が必要な子が結構多いなと率直に感じました。その中で、どうやったらこの子たちが学習に対して喜びや、できた・分かったという感じを得られるかについて考えて今指導しています。

やはり、学校へ来るのが楽しいこと、まずそこが大事だと思います。現在、CSの

お力をお借りして、赤ペン先生として来てもらって子どもたちの丸付けをしてもらうなど、地域の方々に入っただいております。その中で子どもたちが、「今日は誰が来るの」などと、とても楽しみにしていて、子どもたちは学習していても楽しいと思える時間を過ごせています。

さらに、特別な支援を必要とする子どもたちに対してどういうことができるか、一貫教育の中でどういうことができるかということを考えるとき、福生市には知的障害特別支援学級や情緒障害特別支援学級、特別支援教室等があります。

その中で今回、焦点を合わせたのは、知的障害特別支援学級です。知的障害特別支援学級には、各教科等を合わせた指導という、子どもたちが日常生活に準じたものを、実際に活動しながら、学習していくという授業があります。その授業には教科書がないので、各学校で内容を考えています。

例えば、行事単位では何かの行事をしようと呼びかけて、みんなで何かを作ったり、お店屋さんを開いたりします。その中で算数的な活動であったり、国語的な活動であったり、図工的な活動であったり、いろいろな教科の内容を取り入れながら一体的に学んでいます。

しかしながら、この学習には、毎年同じことを繰り返し行っていくという落とし穴があります。教員は、狙いは変えていると言いながら、毎年同じような活動となるため、保護者から、「うちの子はなかなか成長してないのでしょうか」という声を聞くこともあります。

小中一貫の視点から、中学校までの9年間をスパイラルで学習を積み上げることができるようなカリキュラムを作って、それをパッケージ化することによって、どこの段階でどういう力を身に付けるかということを確認にできるのではないかと思います。そうすることで、子どもたちが今どういう力を付けていけば良いかということが明確になってくると思います。そのようなことを知的障害特別支援学級では考えていけると思います。

さらに、他の通常学級で支援が必要な子ども、例えば小学校で基礎的環境整備をして、更に合理的配慮をしているお子さんがいたとします。そのお子さんが卒業して、中学校に入ったら支援がリセットになり、「その支援はなしだよ」となるのではなく、一貫教育になれば、小学校ではどういう環境整備をして、どういう合理的配慮をしていたかが明確になり、支援を継続していけると思います。その中で、発達と共に合理的配慮を少しずつ外していくこともできるというメリットもあると考えております。

さらに、誰一人取り残さないために、例えば中学校に入っても、小学校の積み上がりがなくて、つまづいているお子さんたちがいるとしたら、小学校の教員が手だてを施してその子どもたちを支援するという連携の在り方も考えられるのではないかと思います。中学校で、もう一度小学校の学習を行っていくことによって、積み残していることをしっかりと身に付けていけるのではないかと考えております。以上でございます。

【委員長】

ありがとうございました。特別支援教育の専門的な見地からお話しいただきました。途中で、ぐるぐる回るスパイラルという、一つのキーワードが出てきました。このように9年間やることによって、最後のほうのお話にあった、中学校で後戻りして小学校の学習をするということができると思います。

ここで、1年間ずっと6年生が下級生に付いているということはいかがですか。

【委員】

1年間というより、まず入学当初に大体1学期間付いていて、適宜その6年生が自分たちでお世話に行くといった形で自主的に動きます。最初は決めてやっていますが、その後は6年生が自主的に行くというような形になっております。

【委員長】

ありがとうございます。それから、夏のプールの思い出についてどうでしょうか。

【委員】

夏は、近くの酒造会社の社長さんが昔、水泳に専門的に取り組まれていたということで、本校の水泳の補助員として指導をしていただいています。そこで、子どもたちと競争する機会がありました。夏の水泳指導に来ている子どもたちみんなと競争をしたいという案があり、CSなどの協力を受けて実施しました。その先生は太郎先生という愛称でみんな呼んでいるのですが、低学年や泳げない子は、太郎先生と水中歩行で競争したり、泳げる子については泳力で競争したりしました。大人に勝った時の子どもたちのうれしい顔や、負けた時の悔しい顔が見られました。さらに、他の学年の子どもたちが5年生などを見ていて、僕もやりたい、来年は絶対勝ちたい、来年は僕も参加したいなどという気持ちになって、水泳にもとても真剣に向き合って練習するようになりました。

【委員長】

ありがとうございました。大人に勝つ、年上に勝つということは、例えば小中一貫教育ならば、小学生は中学生と競争してみる、そういう場面もあるかもしれません。

次の委員には特に小中一貫教育についてこのように取り組んだらいいのではないかとや校長会についても随分御提案いただいたので、その辺も含めて、お考えになっているところをお話しいただきたいと思います。次の方どうぞ。

【委員】

私は10人の校長の中でも、福生はもう大分長くなりました。今年で5年目でございます。私からは、小中一貫教育の実態として、既にこの学区で行っていることを少し紹介させていただきたいと思います。

資料にも書かせていただいたのですが、この三中学区の3校は非常に立地条件が良

いです。田園地区の中に、田園通りというメイン通りが一本あります。三中をど真ん中にして、左右に五小と七小があるという最高の立地条件でございます。そして、七五三、七五三と言ってとても語呂が良いのですが、七五三で何かやろうということで、5年間の感想ですが、とても絆が強い感じを受けております。CSの方々とも本当に顔見知りで、いろいろなお話をしていただけますし、そういうような環境で小中一貫は常にやっているのではないかと考えています。

具体的に申し上げますと、去年、一昨年はオンラインで年3回、今年は1学期に1回、小中の教員が一緒になった研修会を、七小に集まって行っています。学力向上、特別支援、それから生活指導という3つの分科会に分かれまして、9年間の教育やその方向性について確認しました。

ただ、この2年間はオンラインで行って行っていたので、各小中学校のメンバーがだいぶ変わり、今年の1学期に会った時に、こんなに変わったのかとお互いに思いました。やはり、顔見知りの関係をつくっていくのが改めて大事だということをこのコロナの2年間に身に染みて感じたところでございます。この会を大事にしていきたいと、教員一同そんな感想をもって終わりました。

それから、既に毎年行っているのは、今度9月27日の火曜日に、5、6時間目、午後1時半から午後3時半まで、小学校6年生が三中に授業を受けに来る体験活動です。国語、数学、保健体育、それから音楽。4人の中学校の教員が小学生に教えます。これも一貫教育の一つだと思っています。

それから、最後に、1つのところに集まって行う引き継ぎ会議があります。中学校に上がる前に小学校でやっておくべきことというテーマで、15分から20分ほど熱く語り合います。こんな切り口で中学校の先生たちは考えるということを小学校の先生たちと共有します。

それから、10月21日には市民会館で合唱コンクールを行います。そこに毎年必ず五小と七小の6年生が来ます。そこで、我々が見てもらいたいのは3年生です。これが最後の完成形だということを見てもらいたいです。しかし、本校は一つの学年が2クラスなので、わざわざ来てもらって2曲だけ聴いてもらうのも変ですので、できたら2年生も見てもらおうかという話を先ほど、午前中にしていました。そういう連絡を取り合っていることも連携の一つだと思っています。

それから、3月の前半には、部活体験ということで、6年生が本校に訪れます。その他にも、生徒会主体で、生徒会長はじめ何人かの生徒が6年生に思いを熱く語るというようなことも行っております。

このようなことを教員は当然するものと考えておりますので、働き方改革から言いましても、ほとんど負担感はないです。また、五小も七小も新しく来られた校長先生ですので、連携しながら進めております。

それから、田園通りを挨拶でいっぱいにしようということで、七五三挨拶運動の第1回を1学期に実施し、今度11月の初めに第2回を実施します。10年ぐらい前に本校の生徒会が小学校の児童会に働き掛けをしたのがきっかけです。そしてその日は、朝に校外に出て、襷を付けた格好をして、のぼりを立てて、挨拶でこの町を明るくする

活動を行っています。

ただ、田園通りに平行した道がもう一本あり、そこを通る子もいます。このところ、人垣の中を歩くのは照れくさいという中学生が出始めて、「田園通りを歩く方が少ないのではないかと最近」ということを言われましたので、田園通りを歩こうと呼び掛けました。実際に挨拶をしていただいている、御年配の、特にお年を召したたくさんの方々が、中学生からエネルギーをもらえたと言って喜んでいらっしゃいました。そのように役に立っているのだから、「皆さんは照れくさくなっている場合ではないぞ」、と言って、みんな田園通りを歩こうよと言っています。今度二学期、リベンジということで11月の最初にやるのですが、そのようなことがあります。

これも小中一貫教育の一つだと思って、絆が強い七五三をもっと快適にして子どもたちの力を付けていきたい、成長させる場としていきたいと思っているところでございます。

【委員長】

ありがとうございました。本当にいろいろ取り組まれていますね。中学校ではよく授業公開や部活に6年生を呼ぶなどしていますが、「合唱コンクール」に呼ぶのはとても良いです。そのうち七五三全体で1曲最後に歌うような取組も良いかもしれないです。

そこで、小中一貫教育を行うところで非常に難しいとよくいわれるのが、カリキュラムを作っていくことや、小学校と中学校の先生同士の関係を作っていくことです。先ほどは、顔見知りになる必要があるということでしたが、七五三の三中学区では、先生方はどんな感じで仲良く、反目しないでいられるのでしょうか。全てに共通する一番難しいところだと思いますが、そのポイントはどんなことなのでしょう。次の方どうぞ。

【委員】

冒頭にも申し上げましたように、それは理屈ではなくて、お会いすることから始まるのではないかなと思います。ですが、オンラインでのやりとりで少し疎遠になってしまいました。いろいろ雑談する時間もないですし、待っている時間にいろいろ話したり、終わってからあの子のことについてどうだとか、そういうような話が、私が来た頃はたくさんあったのですが、オンラインだとなかなかできません。

小学校の先生方は、あの子はどうなったのかというようなことを、本当に気にしてくださいますので、そのような話については、中学校の先生方もいろいろ話したいのです。子どもを介して話す中で、この先生はこんな先生なのだ気付いたり、幸せな小学校生活だったのだと知ったりしながら、だんだん垣根がなくなってくるように私は見ていて感じた次第でございます。

【委員長】

ありがとうございました。オンラインも便利ですが、やはりフェイストゥフェイス

の関係が重要だとのお話でした。ただ、なかなか集まるにはお忙しいという点があるとは思いますが。

そこで、最後、ぜひお願いいたします。次の方どうぞ。

【委員】

今、お話がありましたけれども、小中一貫について考えるときには、具体的に何ができるのかということをやはり考えたいです。そこで、校長やCSの皆さんと一緒に集まって話をしようという会を開くことができました。

その中で、今、お話があったような内容がいろいろ出てきました。小中一貫についても、それをバージョンアップさせてつなげていきます。それから、挨拶運動にしても、スタートは子どもたちが立ち上げてくれた素晴らしい活動であっても、続けていくうちに、大人が主導になってしまうこともあると思います。そこをもう一回子どもたちに任せてみて、子どもたちの力で地域を変えていけるというような自信につなげていくのも良いと思います。

それから、中学生の姿を見て、小学生があんな中学生になりたいという憧れをもちます。あんな大人になりたいというのは、小学生からすると非常に遠い未来のことになってしまいますので、やはり少しずつステップアップしていく感じでモデルになる人に出会うことができることは大事ではないかと思えます。

中学生の子どもたちも、地域の大人たちと関わっていくことで、自分はこんなふう生きていきたい、自分はこの地域でこんな働きができれば良い、この人にこんなふう認められたらうれしい、この地域にいて自分は必要とされているなどと感じる場面を作っていくことができるのではないかと考えています。

今、三中の取組として挙げた中には、二つの小学校から中学校に上がる子どもたちのプレッシャーを少しでも和らげてあげようという活動が入っていて大変ありがたいと思えます。

それに加えて、先日の話合いの中で出たのは、卒業ということもとても重要ではないかということでした。小中一貫校となった場合に、真ん中の6年生の時に卒業式が存在しないのではないかということです。6年生で卒業という区切りを付けて、自分から巣立つこと。そして、次の中学校に行って緊張感を味わうことは、これから社会を生きていく上ではとても重要なことではないかと思うのです。全てのことを大人がフラットにしてあげて、楽に登れるようにしてあげることは、果たして子どもたちに生きる力を付けることになるのかと考えてしまうという話が出ました。

中学校では、小学校を卒業し、入学してきた子どもたちに対して、中学校と小学校でお互いにいろいろな話をして、連携をして、子どもたちがスムーズに適応していけるように対応しています。その一方で、子どもたちに対しては、「今日からスタートだよ。この出会いは新たな出会いであって、自分が新しくどういう自分でありたいかを考えて生きていくチャンスだよ。私たちの前で見せるこれからの姿があなたたちで、それを先生たちは支えていくよ。」ということをきちんと伝えているというお話が中学校の先生からあり、私はとてもありがたいと思えました。

優しさも厳しさもあるように、小学校・中学校が連携して行って、それを地域の方にも、保護者の方にもきちんと理解をしてもらって、子どもたちを正しい形で支えていけるような教育ができれば小中一貫としてとても良いのではないかと考えています。

【委員長】

ありがとうございました。子どもたち主導で、という考え方が大切だということ。それから、よくロールモデルとありますが、小学生にとってモデルになるのは中学生ではないかという話もありました。そして、先ほど七五三でとても連携できているという話がありました。しかし、コロナ禍でオンラインの交流になったこと、それから、教員が異動してしまうということが課題のようです。小中一貫や今の三中学区の良さを、恒常的に続けていくには、異動してしまう先生が、うまく引き継いでいく意識をもつことが大事で、その点についてお考えがありましたら教えていただきたいと思います。

【委員】

感覚だけでつながっているのでは伝えていくのは難しいと思うのですが、きちんとした取組や理念のようなものでお互いに共通理解ができていれば、新しい人が来てもそれを理解することができると思います。少なくとも私も、立場が校長だからということではなく、新しい学校、地域に来ることに関しては非常に緊張しました。しかし、今回そういう点でスムーズに溶け込ませていただくことができたのは、そういうものをきちんと作ってくださっているということと、学校がCS、コミュニティ・スクールであったということが大きいと思います。

地域の方が学校をよく理解してくださっていて、特に今回ここにも出席してくださっているCS委員長は、今までの活動のこと、この学校が大事にしていること、地域として大事にしていきたいこと等のお話を私にたくさんしてくださいました。また、私が思っていることも聞いてくださり、そこでのやりとりがあったことがとても大きかったと思います。

ですので、そういう場に新しい職員も入って、一緒にざっくばらんに自分たちの思いを語り合うことで一つのものをつくっていくこともできますし、続けていくこともできますし、また、新たな風を吹き込むチャンスにもなると考えます。

【委員長】

ありがとうございました。先ほどもありましたが、やはり学校の中で、CSの方や地域の方が潤滑油になっているとのことのお話でした。

それでは次に、小学生にとって中学校への入学は新たなスタートの機会になるということについて伺います。確かに、小中一貫教育というのは中1ギャップを除くことで有効だという考えがあるのですが、例えば中学校からすると、小学校が終わって中学校に入学するという一種の緊張感や新たなプレッシャーも必要だといった考え方もあるようです。その意味からも、新たなスタートの視点も含めて、どうぞよろしくお

願います。次の方どうぞ。

【委員】

私は教員時代に小学校と中学校の両方を経験いたしました。その経験からすると、中1ギャップというものが必ずしもマイナスではないと私は思っています。むしろある程度のギャップがあったほうが良いのではないかと感じています。

その一例として、中学校への入学を、小学校時代の自分の課題をリセットする機会にしてきた子どもを見てきました。そうした意味では、施設一体型よりも、今、本市で進めているような分離型の方が、環境の変化があって、新しい気持ちで中学校生活をスタートすることができるのではないかと思っています。

また、小中一貫による中学校進学への不安の解消、中学生に小学生の手本となるような意識が高まること、小学生の、特に高学年が中学生に憧れをもつ機会が増えるという、前回の報告なども踏まえて、小中一貫の良さを取り入れていけると良いと思っています。

特に、福生市の小中一貫教育を考える上では、福生市の課題である、学力の向上や自尊感情、自己肯定感の向上などのために、どのような小中一貫型の学校にすれば良いかを、例えば学童保育所や放課後子ども教室、それから地域の力をどのように生かしていくかということも踏まえながら、中学校区ごとに考えていくことができれば良いのではないかと思っています。

【委員長】

ありがとうございました。中学校区を中心として、今、福生で課題となっている、例えば自尊感情などを育てていくような分離型の小中一貫教育が良いのではないかとのお話でした。次の委員は欠席ですので、事務局の方で代読をお願いします。

【教育部参事】

福生市の中学校区は小学校区とうまく仕切られていて、大変メリットになると改めて感じました。本市は通学の不便な一面はあるものの、その区分けがしっかりしているので、小中学校間の引き継ぎ、連携がしやすいです。今後の小中一貫校設置へスムーズに移行しやすい条件が整っていると思います。

小中一貫校のメリットとして、9年間の連続性と縦割り組織の導入により、より活発な活動が期待できるものと考えます。現行の中学校区の小中連携教育を更に推進し、今後につなげる意識を高めていくことが大事だと考えます。

【委員長】

やはり中学校区を大切にしていきたいという御意見だったと思います。先ほど、小学校から中学校へ行く時、新たなスタートを切れたり、リセットできたりするようなお話をいただきました。ちょうど次の委員も、小学校でのあまり良くなかった思いなどをリセットする機会が大切だとの御指摘がありましたので、お考えいただいている

ところをお話しただけであればと思います。次の方どうぞ。

【委員】

福生一中では毎年一中学区の地域懇談会というのを行っておりました、今年10月8日に、学校と地域と一緒に何ができるかということテーマに話し合いました。人選は、学校関係者、PTAもそうなのですが、CS委員。それから、地域の町会長をはじめとする町会の皆さん。それから、青少年育成地区委員長会の皆さんや民生委員にも声を掛けて、昨年は70数名お越しいただきました。今年ももう少し多い規模を予定していますので、ぜひ教育長にもお越しいただければありがたいと思っています。

そういう意味で、毎年地域の皆さんに集まっていたいて、学校に望むことや生徒にこうあってほしいと願う生徒の姿などについて皆さんから御意見いただくことによって、一貫教育にしやすい環境がすでに今あるかと思っています。

その上で今回挙げさせてもらったことは、福生市で一貫教育に取り組む際の、この9年間を生かす福生市としての独自性についてです。だいぶ前から福生市も、横田基地と隣接しているということもありまして、英語教育にはかなり力を注いできているわけですが、これを更に進めまして、福生市の小・中学校を卒業したら英会話を普通に話せるような市になりたいということの一つ挙げさせてもらいました。そういった意味での福生市の独自性ということです。

また、先ほどおっしゃられた、これまでの嫌な思いをリセットするタイミングも大切だと思います。私もどちらかということと中学入学を機にリセットできた方ですから、分離型の一貫校が私は望ましいと思います。

【委員長】

体験に基づいたお話、ありがとうございました。

続きまして、民生委員・児童委員協議会の委員には、中高一貫のいろいろな形のメリットや前回の武蔵村山市の例のことについて、様々な御意見をいただいたので、どうぞお願いいたします。【委員】

今回、私の方で5つほど項目を挙げさせていただきました。これは、前回・前々回を含めて、皆様方のいろいろなお話、また、検討事項などについて私が感じたことです。大部分が小中一貫のメリットや賛成意見です。

まず、福生市の地域性はコンパクトシティということもあり、凝縮した中で行えるメリットがあるのではないかと考えました。人口減少に伴う施設のコストについては、行政側で施設を管理するには大変な御苦労があるのではないかと思います。また、先生方の配置なども、ある意味まとめることによって何か利点も出てくるのではないかと感じました。

そして、これ以降は皆様方と大体同じような意見なのですが、6歳から15歳までの児童・生徒が、一緒に交流できるということもとてもメリットがあるのではないかと考えます。また、中学校への進学に対して不安を感じる生徒も少なくなるのではないかと思います。

こちらの資料に挙げさせていただいた、長期スパンで行える小学校の学習について、福生市の地域性に合った児童・生徒が求める自由度の高い独自のカリキュラムを作ることができるのではないのでしょうか。

また、今度は先生方の目から見て、同じ生徒を同じように見守れるということも何かの向上につながるのではないかと考えました。

そのようなことを踏まえ、地域や私どもの立ち位置として残りの2つを考えました。時代が巡ると、環境もどんどん変化していきます。その中で、いろいろな教育環境の下、いろいろな体験、チャレンジ、好きなことへの思い、様々な学問分野などに取り組める場を用意していくことも求められていきます。そのためにも、私ども地域が、後押しすることがとても重要であると思います。民生委員を含む、地域の方々の後押し、また、伴走がとても大事だと考えました。

コンパクトシティということの一つの利点として考えて、アウトリーチが届くメリットがあるのではないかと考えて、資料に挙げさせていただきました。

【委員長】

ありがとうございます。ここに小中一貫のメリットについてまとめていただいたと思います。福生ならではのオリジナルのもの、自由度の高いものができるのではないかと。そして、本当に素晴らしいと思うのは、地域をはじめとする周囲の協力や後押しで、これが福生の強みだということです。全ての学区でCSという制度がある中で地域が潤滑油になっていくところが、小中一貫を進めていく上での福生の大きな特徴であるような気がしております。

それでは、今、CSのお話をしましたが、同一敷地内施設隣接型が良いのではないかと、また、個人カルテみたいなものにも触れていただくようお願いいたします。次の方どうぞ。

【委員】

今日皆さんの思いの丈をお聞きいたしまして、非常に満足しております。私からは、ここに書かせていただきましたけれども、児童・生徒が一貫教育を9年間受けられるという実感ができる仕組みが一番大事なのではないかと思っています。継続的に寄り添い、そして、誰かがいつも見ているという実感ができる存在。これは、先生でもあり、小学生にとってみると中学生でもあり、あるいは地域でもありということではないかと思っています。

そうした時に、自己肯定感、自尊感情をずっと保てるかということ、例えば、学習、勉強のつまずきや、友達同士との仲たがいなどがあった時に、あるいは中学生と小学生の関係で言えば、中学生が、この時に僕はこうやって乗り越えたとか、あるいは先生方が、あの頃この子についてはこのところで学習がつまずいたから、それはこうやったら解決してあげられるのではないかなど一人一人に配慮することがとても大事になってくると思います。それを小中一貫教育としてどう担保してあげられるかがポイントになっていくのではないかと気がいたしました。

今、少子化が進んでいますが、昭和の時代、私たちが子どもの時には、物心付いた時にはお兄さんがいて、お姉さんがいて、妹がいてと1つの社会が家庭の中にありました。そして、地域の、隣近所を見てもっと大きなお兄ちゃんがいて、ガキ大将がいて、そこで必然的に様々なことを学んでいました。

もちろん、いじめなどもありましたが、それを乗り越えて徐々に強くなってきました。しかし、今の時代の子どもたちは一人っ子が圧倒的に多くなってきています。そうした時に、自分が学校に上がるまで、あるいは、保育園、幼稚園に行くまでは、家族以外の人間関係を作ることがとても難しくなっています。要するに、孤立しない、させないための教育が大事になってくるのではないかと感じました。

今、学校の授業参観などをしている中で、私が知っている子どもたちは、自分の思いを言葉として、文字として表現する力がとても弱い感じがしてなりません。要するに、言葉が少ない。語彙（ごい）力が少ないが故に自分の思いが伝えられない。もしかしたら、校長先生にも言いましたが、昔でいう、読み書きそろばんのような、読んで書く力をどうやって育てていくかということもこの小学校・中学校9年間の大事なテーマの一つになってくるのではないかという気がしております。

【委員長】

ありがとうございます。9年間というスパンの中で子どもを見る大切さというのを前半でお話しいただいたと思います。それが、小学校・中学校、例えば小学校の先生は6年間で終わりではなくて、小中の先生方で9年間見ていき、そこに地域の方が入っていくと良いのではないかということ。それから、学力の課題の中でも、福生の子どもたちは思いを伝える力が弱いのではないかと、分析もしていただきました。もしかしたら、小中一貫教育の一つの柱は、そういう力を付けていくことになるのかもしれない。

それでは、お待たせいたしました。副委員長のお二人、お願いいたします。

【副委員長】

最近の出来事をいくつか紹介したいのですが、先週の土曜日、学校公開がありました。学校公開の場には第二中学校の吹奏楽のメンバーが来てくれて、6年生と1年生に演奏を披露してくれました。

とても良い演奏会で、私が思わずうるっとくるような感動的な場面もあったのですが、1年生と6年生の保護者もその場にいました。翌週の月曜日に、たまたまその演奏会に参加していた1年生の保護者が、学童のお迎えに来られたのか子どもと一緒にいる場に出くわしました。そうしたら、保護者の方から、「先生、この間の二中の演奏すごく良かったですね。感動しました。この子はまだ小さくて、中学校までまだまだ時間はありますが、この子が中学生になったらどうなるのだろうというのを少し想像しながら演奏を聞いていました。」という感想をくださいました。すごく良い感想だと私はその時に思いました。

私は常々、キャリア教育は小学校1年生から始めるべきだという話を教員にしてい

るのですが、保護者がそういう視点をもってくださった機会になったということがすごくうれしかったです。

同じ学校公開の時に、情緒障害特別支援学級が設定した、保護者対象の進路を考える場に、第一中学校の情緒障害特別支援学級の先生と、六小から一中に行ったOBの二人の生徒が制服を着て参加してくれました。二人は中学校生活について6年生に発表をしてくれました。なかなか厳しい話が多くて、小学生は少し驚いているような状況でしたが、そういう話を通して、中学校のイメージを具体的にもてたようでした。これもキャリア教育につながる話です。

午後のコミュニティ・スクール委員会には、今年から保育園の園長先生に入っただいておりますが、この方がおっしゃっていたのは、福生では最近、幼保小連携を一生懸命やっていて、小学校にとっても来やすくなったし、話もしやすくなったということでした。その上で、今度は小・中学校がつながってくれていることで幼保が中学校とも交流しやすくなるかもしれないという期待を話してくださって、とても良い御意見だと思いました。

これは二日前の話なのですが、校内研究で6年生が少人数の授業を公開した時のことです。1学期に二中校区の小学校の教員全員が中学校の授業を見せていただいたのですが、やはり6年生の担任は感じるところがとても多かったようです。今回の校内研究は算数で行われましたが、いわゆる発展クラスを担当した教員が、算数で立体を扱いました。その際、中学校段階で求められる思考や技能につながるような教材を一部用意していたのです。実はこの発想は、それこそ都立高校の入試までつながるような話なのですが、そういう視点の大事さを中学校の授業を通して授業者は感じたようで、そのようなところが、研究授業の中で見られたのは、とてもうれしく思いました。

今日、特に校長先生方が5月の会に比べて、とてもたくさんお話をされていました。昨年、校長会の中で、福生独自の課題を解決していくためには一貫教育が大事なのではないかということを経験者同士で随分話し合いました。その中で、市の研究会も小中合同でやったほうがいいのではないかということを経験者として提案していくような場面がありました。小学校は今年何人か校長先生が代わられて、いわゆる小中一貫教育に本気で取り組み始めたのはこの4月からなのかと私は思っていますが、ようやくここに来て皆さんがいろんなメリットを実感されてきたからこそ今日のたくさんの発言につながったのかと思いつつ皆さんの話を聞かせていただきました。

たくさんのメリットをお話ししていただきましたが、先ほど委員長が、1つ懸念されることとして、小学校と中学校の先生方の、なんとなく反目するようなイメージについてお話しされました。その点についても、いろいろな交流事業を重ねる中で、結局は同じ子どもの姿で話ができるので、意外に盛り上がっていく中で改善されていくと思います。これからも同じ子どもの姿を通して、みんながつながっていることを実感できる場面が増えていけば、福生の教育自体が一層、素敵なものになっていくと感じています。

【委員長】

ありがとうございました。具体的につい最近までの例を挙げていただいて、たくさんの方のメリットについてまとめていただきました。

それでは、副委員長お願いします。

【副委員長】

今日は本当にたくさんのお話を聞きましたので、もう付け加えて話すことがないかと思いますが、先ほど福生に長くいると言われ、思い出したことがあります。私が三中に配属されたときに、当時の教育長でいらっしゃった宮城先生から最初にお話しいただいた、「小中連携教育を推進してください」という言葉です。

実際、「小中連携」は当時のトレンドで、私は前任校でも多少小中連携の取組を行った経験もあり、その経験を踏まえ、福生でも頑張っていこうと思い校長としてスタートしました。

少し恥ずかしい話ですが、最初に小・中学校の先生方で分科会をつくり、分科会ごとにいろいろなミーティングをした時のことです。私は、小学校の先生に「中学校に入る段階の学力、つまり小学校が終わった段階での小学生の学力を確認するための算数と国語の簡単なテストを作ってもらえませんか。」というお願いをしました。するとある小学校の先生から「先生がなんで私に命令するんですか。」と言われてしまいました。その先生は、「あなたは私の上司ではないから私に命令できないでしょう。」と言いたかったようです。このように言い返されまして、心がとても傷付き、折れそうになりましたが、当時の雰囲気はそのような状態でした。

そうしたスタートだったわけですが、その後着々と福生のそれぞれの中学校区で連携が進められてきていますので、小中一貫校を目指す、あるいは一貫性のある教育を推進していこうという土壌はもうできているのではないかと思います。

学区によってそれぞれ取組や活動は違うのですが、少なくとも小学校の先生方と中学校の先生方が反目し合うような雰囲気はもうなく、お互いに学び合おうという雰囲気ができていると思います。

次に、こういうことをやっていきたいということをお話しさせていただきます。やはり小・中共通して指導したいことがあります。これは学習というよりはどちらかというと生活指導的なことです。今、タブレットが全員の児童・生徒に貸与されていますが、この使い方やルールが、学校によってかなり差異があります。小中の違いもありますし、中学校同士でも違いがあります。ですから、せめて学区の中で、考え方やルールを共同で作っていただけると良いのではないかと思います。

また、このことを少し広げると、SNSルールがそれぞれの学校で作られています。発達段階も踏まえつつ、この校区ではこういうSNSルールにしていこうという話合いがあってもいいのではないかと思います。

さらに、これは教育課程に関わることですが、生活・総合や特別活動で地域の方々をお呼びして体験的な学習をすることがあります。本校ですと、天王ばやし保存会の方々を中学1年でお招きして天王ばやしを披露していただくのですが、学区の小学校

でも同じ天王ばやしの方々に来ていただいている学校があります。小学校で体験したものを中学校で体験することになりますが、一方で体験していない小学校もあります。これは一例ですが、こうした活動について小中一貫の視点で見直していくことも必要だと考えます。

この地域ではありませんが、職場訪問や職場体験といった学習活動も、小学校で行ったことを、中1でも同じように実施しているというようなことがあります。

ですから、こうした活動について小学校と中学校が情報交換を行い、仮に、同じゲストを招く場合でも意味付けを変えていくなどの工夫が行えるとよいと思います。

各教科についてはある程度9年間の流れというのができていると思います。しかし、学校行事や体験的な学習などについてはまだまだ整理の余地があるのではないかと思います。

【委員長】

ありがとうございました。先ほど副委員長から、算数と数学の系統なお話がありましたが、あれはいわゆる教科の内容のつながりでした。今は、それとはまた別の、タブレットの使い方、SNS、それから学校行事などの系統性を作っていくなどについてのお話がありました。

今までのところで確認させていただきたいことが3点あります。第一に、小中一貫教育はやはりメリットが大きいのではないかとということです。第二に、小中一貫教育の進め方については、福生の場合は実際の中学校区が非常にしっかりしているので、福生における小中一貫教育は、中学校区をまず基本としたほうが良いのではないかとということです。

第三については、一体型にはいろいろなメリットがあるかもしれませんが、現実を考えていくと、今ある施設を生かした分離型で取り組んでいくのが良いのではないかとということです。

事務局から、次第の4の小中一貫校への不安や課題などについて簡単に説明をお願いします。

【教育部参事】

ただいま、委員の皆様からは、期待、そして必要性といったところで御意見をいただき、委員長にも三つのカテゴリーにまとめていただいたとっております。

一方、心配なことについても委員の皆様からいろいろな内容の御意見をいただいております。いくつかカテゴリーに分けられると考え、事務局といたしましては具体的に七点にカテゴリーを分けました。

一点が、施設の形態について。二点が、人間関係について。三点が、進路選択について。四点が、教職員への負担、小中相互の関係の構築について。五点が、検討委員会等の運営について。六点が、保護者・地域の理解について。最後七点が、学区域について。我々としてはこの七つのカテゴリーに当てはまるような御意見が比較的多かったように捉えてございます。

現在委員の皆様が心配に感じている、これらの課題をクリアしていくために、お考え、あるいは、その解決策等々について様々な御意見をいただければと思っております。本日は残りのお時間の関係でなかなか難しい部分もあるかと思いますが、忌憚のない御意見が委員の皆様からいただければと考えている次第でございます。

【委員長】

ありがとうございます。この七つについては、今日も何人かの委員の方からも出ていましたし、先ほど施設のことについて御質問がありましたので、まず一つ、施設の形態について、少し検討したいと思います。

まず委員、事務局へどのような御質問がございますか。

【委員】

小中一貫校の施設形態の分類には一体型と隣接型と分離型があるわけですが、御意見の中で、今日は小中一貫教育の中身の議論をした中で、ハードの部分、建物のことをちょっと質問させていただければと思っています。

これは企画財政部の菊地参事に、答えられる範囲でお答えいただきたいのですが、1回目の検討委員会で配られた資料「福生市の公共施設の課題」を、今日出席するためにもう一回見たのですが、その中で、公共施設の4割が学校教育系の施設でありました。そして小・中学校の築後の経過年数が全て50年以上と老朽化していて、最も古い学校では60年も経っており、この対策には、建物の長寿命化か、再配置、つまり新築の二つが考えられるとのことでした。

そこで、質問が2つありまして、この福生市の公共施設の課題の中の2ページ目、公共施設複合化・集約化というイメージの中に、地域対象施設・機能を学校周辺へ集約するというくくりと、建物内へ集約するというくくりの二つが考えられています。これは施設形態に限りなく関わってくると思うのですが、企画財政部としてのこの二つのくくりの考え方をもう一回説明いただきたいです。

それからもう一つは、学校の老朽化と再配置の推進のイメージについてです。福生市の個別施設計画では市内を分けていますが、一中・三小がある南東地域、二中・六小のある北東地域、三中・二小・五小・七小がある南西地区、一中・四小がある北西地区の四つに分かれています。その中で、これはあくまでも計画でしようが、令和12年までに二小から三中までの南西地区の長寿命化を考えており、令和17年から第2期の前半で、一中、三小の南東地域をモデル事業として位置付けて再配置を計画していますと書かれています。このモデルというのはどのようなモデルを描こうとしているのでしょうか。地域の集会施設などを含めた一つの建物への集約として一中・三小がモデル事業として実施されることを希望します。その2点についてお答えいただける範囲でお答えいただきたいです。

【企画財政部参事】

まず一点目については、市の個別施設計画の中で、将来の公共施設の再配置のイメ

ージを二つ出させていただきました。一つは、今御説明があったように、学校の周辺に地域の身近な施設を集めるもの。そしてもう一つは、学校の校舎自体に複合させてしまうというような、二つの類型を出させていただきました。

我々の個別施設計画の検討段階においては、小中一貫教育などの、ソフトの論議はあまりされていなかったのですが、他の自治体のいろいろな集約の形などを見ますと、学校本体の中にいろいろな公共施設を集めて、合築しているというような事例がございます。それは子どもたちのメリットにもなるかと思えます。

例えば、高い機能の図書館があれば子どもたちもそういったものに触れられますし、プールなどが入れば、子どもたちが使っていない時間に市民に開放できます。また、そういう合築をすることで学校と地域の交流が生まれるなど、子どもたちにとっても地域の方にとっても良い施設の配置ができるのではないかと考えてみました。

しかしながら、例えば学校の敷地が狭く、物理的に難しいこともあり得えます。ただ、そういった場合にも、学校の周辺にいろいろな公共施設を集めれば、例えば防災上のメリットや地域との交流、あるいは子どもたちのメリット、他の地域の身近な施設と結び付くというメリットなども考えられます。

今、市のこの二つのくくりのどちらが良いかについては特に見解は出してはいたのですが、将来のイメージということで出させていただきました。

それから二点目の、四つの地区に分けて、第1期は長寿命化を図り、第2期は、今の一中の付近の再配置を進めていくというようなイメージについては、40年間かけて市内の公共施設の再配置を進めていこうという個別施設計画をどのように進めていくかという一つのシナリオです。

まず、我々が思ったのは、すぐに再配置には踏み込まず、今日皆さんにお話しただいているようなソフトの中身、教育の中身の論議も検討も必要ですし、実際に学校などの公共施設を動かしていくというのは、かなりいろいろな話し合いをした上でそういう段階に踏み込んでいかななくてはいけないということになりました。

そういう意味では、実は40年間の最初の10年は検討の10年という位置付けだと思っています。ただ、そうは言っても古い学校があるので施設の寿命を少し延ばすなどの、そういった手だてを講じていくというようなイメージを描いております。

最初の10年が終わって、次の10年の段階で、どこから再配置を進めていくかを考えます。一遍に再配置を進めると、お金の負担もかかってしまいますし、地区ごとに順番に再配置を進めたら良いのではないかと考えました。一つのシナリオとしては、例えば市を代表するような公共施設も周りにある一中を中心に、何か再配置ができないかと考えたところでございます。

ただ、あくまでもイメージでございいますので、具体的な中身、例えば、どの施設とどの学校が結合するなどまでは正直描ききれっていません。

また、個別施設計画については、四つに分かれたイメージを出していますが、分離型ということで皆さんの頭に浮かぶのは、三つの中学校区に分かれたイメージだと思います。こういった整合も含め、何よりもソフトの中身の論議があつての学校の統廃合、箱物の統廃合だと思っていますので、その辺は、個別施設計画のイメージとして

はいろいろ書かせていただきましたが、この在り方検討委員会の論議も含めて、御意見を賜りながら柔軟に決めていきたいと考えております。

【委員】

廃校や統合などのイメージでなくて、新しい学校ができるという市民のイメージにつながるような取組であってほしいというのが私のお願いです。

【企画財政部参事】

ぜひそのような視点を持ちたいと思います。ありがとうございます。

【委員長】

今の回答は、そういう新しい学校を作っていくという視点をもっているということによろしいでしょうか。ありがとうございました。そういう意味でも、すぐに新しく施設一体型の学校を造るということではなくて、今あるところで、小中一貫、分離型でやってくのが良いのではないかということだと思います。事務局、それによろしいですか。

【教育部参事】

はい。

【委員長】

分かりました。それでは、最後に、教育委員会の方で、お願いいたします。

【委員】

皆さんからいろいろな御意見いただきまして、ありがとうございます。私は、PTAの役員や、子ども会の会長などを務めさせていただいた経験がありますが、その視点で申し上げますと、こういった変化がある時に、PTAもそうなのですが、保護者の方々は、不安なことが非常にあって抵抗を感じるが多々あると思います。そういったことを考えると、この議論の中で考えてほしいのが、そういった方々を安心させる強いメッセージです。「福生市の教育はこうやるんだよ」、「一貫教育はこういうものなんだよ」といった強いメッセージがあれば良いと感じました。

【委員長】

ありがとうございました。保護者の方、地域の方に十分に御理解いただくような手だてが必要だということだと思います。

それでは、事務局の方で次回までの課題について説明をお願いします。

【教育部参事】

本日資料3として感想等をお書きいただくものを配布させていただいております。

ただし、先ほど委員長にもおまとめいただきましたが、委員の皆様から小中一貫教育のメリットについて多くの御意見をいただき、なおかつ、今ある中学校区を崩さないということが一つのキーワードとして上がってきております。さらには、施設を今すぐどうするかということではなく、今ある中学校区の中での分離型の小中一貫教育を進めていくという方向性を今回の会で一步前進できたと考えているところでございます。

そこで、本日お配りしている資料の3については、小中一貫校開設に向けた懸案事項という題を付けておりますが、これを、分離型の小中一貫校ということで一つ視点を定めさせていただきたいと思っております。さらには、このお話を今回次第の4ということで進めさせていただきかけたところですが、委員の皆様からの御意見をいただくお時間がなかったことから、七つのカテゴリー別に皆様から御意見をいただこうようにしようと思っております。ただし、施設の形態につきましては今お話ししたとおりですので、それ以外の六つのカテゴリーについて、委員の皆様から、心配に感じていることや、あるいは懸案事項について御意見をいただければと思います。

しかし、今お配りしている資料3ですとこのカテゴリーになっていませんので、改めて事務局で様式をカテゴリー別の表に作り直させていただきたいと思っております。

これを委員の皆様へ改めてお送りさせていただき、御記入いただきます。そして次回までにそれを事務局でまとめ、第4回でまた委員の皆様から御意見を賜る、というような流れを考えてございます。

【委員長】

それでは、今お手元にある資料3ではなくて、進路選択以下三つ、それから人間関係以下三つの六つのカテゴリーが表になったものをお送りして、それでまた御意見をいただいて次回のこの検討委員会に臨むということでお願いいたします。

それでは、司会を事務局に戻します。

【教育部参事】

委員長、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして令和4年度第3回令和における福生市立学校の在り方検討委員会を閉会いたします。誠にありがとうございました。

【17時00分閉会】